

## 平成 27 年度第 2 回浦安市文化財審議会議事録（議事要旨）

1 開催日時 平成 27 年 7 月 15 日（水） 午前 10 時～12 時

2 開催場所 郷土博物館 視聴覚室

### 3 出席者

（委員）平野敏則委員長、杉山徳生委員、丸山光子委員、丸山純委員、吉田敦委員、大塚三枝子委員、菊池眞太郎委員

（事務局）細田教育長、石田生涯学習部長、永井生涯学習部参事、飯塚館長、島村、林（記） ※細田教育長 途中退席

（傍聴人）なし

### 4 議 事

(1) 浦安市郷土博物館の活性化について(検討)

(2) 「もっと知りたいふるさと浦安展」(準備中)の視察及び意見聴取

### 5 会議経過

会議に先立ち、平野委員長、細田教育長があいさつを行った。

進行上の都合により、議事の(1)と(2)の順番を入れ替え、(2)「もっと知りたいふるさと浦安展」の視察を先に行った後、(1)浦安市郷土博物館の活性化についての検討に入った。

#### (2) 「もっと知りたいふるさと浦安展」(準備中)の視察及び意見聴取

7月18日(土)から始まる展示会であるため、準備段階ではあったが、担当より内容の説明を行いながら、企画展示室を視察した。

展示されている資料や作品についての個別の質問はあったが、展示会そのものについて、会場では特に大きな質疑はなかった。

#### (1) 浦安市郷土博物館の活性化について(検討)

教育委員会へ提案する報告書(案)として、前回まで審議いただいた意見を項目ごとに整理してまとめ直した資料をつくって配布し、それに基づいて内容の検討を行った。

主な質疑・応答については、下記のとおり。

(委員) 資料のなかで、「Ⅰ現況・Ⅱ課題と対策の方向性」のところに、それぞれ「事務局でまとめる」と書かれてあるが、そもそもこの資料全体は何に使うためのものなのか?

(事務局) 「博物館はこういう現状にあるため、こういう課題を抱えている。その課題のためには、どういう対策が必要か。その方向性について、文化財審議会で審議し、委員の皆様からこのような意見を頂戴した」という流れにしたいと考えているた

め、ⅠとⅡについては事務局で内容をまとめさせていただき、後に審議会で諮っていただきいと考えている。

「Ⅲ 文化財審議会の意見まとめ」の部分は、前回・前々回の審議会において皆様から頂戴した意見を集約してみたものである。本日はさらに議論を深め、この部分をもう少し膨らませることができれば、文化財審議会としての提言書というかたちでまとめられるのではないかと考えている。

(委員) 文化財審議会としての提案書、提言書のようなものを作成するというのか？それをどう使うのか？

(事務局) はい。文化財審議会は、文化財について教育委員会に提言するという職務がある。その職務の範囲で、博物館の活性化について審議していただいた内容を「文化財審議会の提言書」としてまとめ、教育委員会に提出したいと考えている。

(委員) 「16万市民みんなの博物館 ×漁業の歴史だけ ×元町の歴史だけ」と、記載されているが、この「×」の意味は何か？

(事務局) これまでの博物館は、「漁業の歴史だけ」「元町の歴史だけ」を取り扱ってきたが、これからはそうではなく、中町や新町、また埋め立て以降の歴史も含め、浦安全体のことを本格的にとらえてやっていかなければいけないのではないかと意見を前回の会議でいただいたので、このように表現してみたものである。もちろん報告書にまとめる際は、この内容をきちんと文章化して表現する。

(委員) 「③現テーマ展示室を活かしたソフト面の充実」のなかに、「ワークシート作成」とあるが、「ワークシート」とは何か？

(事務局) クイズの問題用紙のようなものをイメージしていただくとよい。展示をよく見ていただくためには、館が伝えたいと思っている見どころやポイントを先に教えてあげないと、お客様はどこを見ていいのかわからず、漠然と通り過ぎてしまうことが多い。屋外展示場を例にあげれば、子どもの学年に応じて「この道具を探そう」というようなクイズ問題を書いた用紙をつくり事前に配布しておく、見る目的がはっきりするので、学習効果が高い。子ども対象だけでなく、つくり方によっては、大人でも、外国人でも、それぞれの対象に応じて、いろいろなワークシートが考えられる。

企画展で初めてワークシートを使ってみたのが、平成16年度に開催した夏休み子どもミュージアム「ぜね物語～たどろうお金の歴史～」のときである。古銭コレクターの市民の協力で開催したものだが、たくさんの古銭が並んでいても、「わあ、すごいね」ということだけで終わってしまい、何を見たらいいのかわかりにくい。そこで、チラシ裏面をクイズ問題にし、展示を見て回答してもらう仕掛けをつくってみた。クイズ全問正解者には、寛永通宝(実物)をプレゼントする、ということをやってみたところ、子どもばかりでなく、大人も夢中になってクイズに取り組んだ姿が見られた。クイズ形式がいかに有効かということが確認

できたので、その後の企画展でも、チラシ裏面をクイズにするというやり方を取り入れたものも多い。

また、平成 24・25 年度に子ども実行委員会制で開催した「博物館まつり」でも、実行委員の子どもたちがテーマ展示室についてのクイズ問題をつくり、お客さんにチャレンジしてもらって全問正解者には「アサリでつくるあっさり君」工作チケットがもらえる、というようなことを行った。そのときも、たかだかプリント一枚なのだが、大人も含め大勢の人たちが、クイズ問題を解くために真剣に展示を見ているという現象が確認されている。

ワークシートは、展示をよく見て理解してもらうためには、有効な手段である。

(委員) 「④ 屋外展示場の有効活用」のなかに「ロケ」とあるが、これは十分に気をつけないと、館の意図とは違う伝え方をされてしまったり、文化財住宅に釘を打たれてしまったりと、文化財として最も大切なオーセンティシティ (Authenticity 信憑性・本物であること) が無視されてしまい、この展示自体を汚されてしまうというようなことにもなりかねない。また、撮影班に占拠されてしまって、その間一般の来館に制限がかかってしまったりすることもある。館がリードをして、オーセンティシティをきちんと保つことができるような使い方に限ったもののみを認めるというように、慎重にしていく必要がある。

(事務局) 市として全面的に撮影協力しているものについては、館としても受け入れているが、カラオケや演劇の背景に使わせてほしいなど、屋外展示場の時代背景に関係ない依頼は、すべて断っている。また、来館者がいる時間帯での撮影も、原則として断っている。現在は、浦安を紹介する目的の番組のみ、撮影を許可しているところである。

(委員) かつては、私も文化財住宅の撮影については制約していくべきとの意見を持っていたが、ある時期から考え方が変わっていった。県のある博物館で経験したのだが、商工会議所の方など違う立場の人から「なぜそこまで制約するのか？ ロケ現場を見に来た人たちだとしても、ちょっとでも入ってもらう方がよっぽどいいではないか」という意見があった。地元のフィルムコミッションなどを經由して、PR を兼ねてもっと積極的にやったらどうか、という地方の博物館も今は結構ある。基本的なことはもちろんはずせない部分もあるが、少しタガを緩めて考えて、PR のために使えるものは使った方がいいのではないかとも思う。

(委員) (実物の移築ではない) 県の施設と浦安の屋外展示場とでは少し違うと思うが、大事なところの文脈を変えられないようにすることが大切なのではないか。市民の結婚式に屋外展示場を使うなどは、賛成である。

(委員) 「⑦博物館広報の充実」の「SNS を活用し、ネット上での博物館の応援団の結成」についてだが、広報活動というものは職員が直接やらなくても、来館した人がツイッターで発信して紹介してくれたり、写真をアップしてくれるようなこともあ

る。そのためには、絶対にフリーワイハイを設置することが必要である。

(委員) 全体的なことだが、こんなにいろいろな要求が出て、10人くらいしか職員がいないクラスの博物館では、とてもやっつけられないのではないかと思う。

国立・県立・市町村立と、それぞれ博物館があるのだが、最近になってやっとその棲み分けができてきたのではないかという気がしている。昔は、一律に「博物館・美術館というものは、来館者の高度な知的要求を満たせる施設である」ということで、地域の良いものをできるだけ見せなければならぬという考え方が長い間続いていた。でも、最近になって、そういうことは国立や県立に任せておけばいいのではないかと、市町村立の博物館はもっと地元に着したものでなければならぬのではないかと、今回の資料に書かれているようなことが包括されるようになってきた。地域のコミュニティのなかで、高齢者対策だの、いろいろな施設との連携だの、「なぜこのような問題までもを博物館が担わなくてはならないのか？」という疑問を学芸員は持っているのではないかと思うけれども、その疑問を外さなければならぬ時代になってきたと言えるのではないだろうか。

博物館というものは、資料を集めて展示したり研究したりということで、「モノ(物)」を扱うところなのだけれども、これだけ多くのボランティアがいる浦安の博物館に来て初めて気づいたことだが、この「人」「人材」こそが、少し言葉は悪いが、この博物館の持つ資料、つまり財産なのだと思う。これまでは、それをうまく活用して運営されてきたのだと思っている。結局、「おじいちゃん・おばあちゃんから子どもまで」という開館時にうたっていたことと、現在も目指すところの本質は、なんら変わっていないのではないだろうか。この目標に伴って、いろいろな事業が組み立てられているのだが、先ほど言ったとおり、「とてもこの職員数ではやっつけられないよ」という問題がある。そこで必要なのが、この資料にもあるように「博物館協力者をサポート、コーディネートする人材の育成」になる。こういうことをどんどん積極的にやっつけていかなければ、もやいの会の高齢化問題を含め、今の職員数ではとてもやりきれないだろう。そういう人材の育成を一気にやっつけようといっても無理なのだから、今何が一番遅れているのかということを見据えながら、きちんと計画を立ててやっつけていく必要があるだろう。

この資料には、そのため「具体的な課題」として7つの項目が挙げられているのだが、それに沿ってどういう事業をやっているのかということをもっと明確に見えるようにしてもらいたいと思う。例えば、ボランティアと協働でどういう事業をやっているのかということなどが個々に見えてくると、「この部分が遅れているな」というようなことが、視覚的に我々も市民も認識できるのではないだろうか。そこで、「その遅れている部分をどうしようか」と考える、というようにもっていかなくてはならないのではないかと。方向性はこれでいいですよ、じゃあ

具体的に何をしましょう? というところを、これからもう少し明確に出していただければと思う。

浦安は市域が狭いので、「人が集まりやすい」という、他の市町村にはない大きな利点がある。県内でも、博物館に行くにも交通の便が悪く半日かかってしまうようなところがたくさんあり、「この博物館は自分たちの施設だ」という認識を市民に持ってもらうことすらもなかなか難しい。それに比べると、浦安はそれだけ市民に関心を持ってもらいやすい施設だということになる。そういうことを踏まえて、「こうした方がいいんじゃないか」ということを少しずつ積み上げていけばいいのではないかと思う。

(委員) 「③ 16万市民みんなの博物館」というところで思うことは、今の博物館だけでは、16万の人に来てもらうというのはとても難しいことだと思う。今回の資料は、教育委員会だけではなく議会の方へも見てもらえるということなので敢えて申し上げるが、海を楽しめるような島のようなものや境川を利用して博物館の乗船体験とうまくつなげることができるような施設ができればいいと思う。せっかく海があるのに、眺めているだけで何もできないのが今の浦安市民なので、将来的にはなんとかしたいと考えている。

(委員) 東京では、月島とか門前仲町とか、古い町の良さが見直されて観光地となっているところも結構あるが、商工会議所などでフラワー通りの活性化や復活というような動きはあるのか。それに伴って人が動くようになってくれば、博物館の来館者へとつなげられるのではないだろうか。

(委員) フラワー通りも、商店の二代目・三代目の後継者が、浦安の開発に伴う大型店舗の進出によって、そこにテナントとして入るようになってしまい、フラワー通りに活気がなくなってしまったという経緯がある。商工会議所のなかでも、境川を埋めて境川側に店をもっていったらどうか、というようなアイデアまで議論されたこともあるが、境川が一級河川であることもあり、実現には至らなかった。

現在は、真ん中に位置する正福寺の行事を兼ねてフラワー通りを復活させようという動きは若干あるものの、商店だった建物がアパートになったり、マンションになったり、みんな仕舞屋(しもたや・商店ではない普通の家屋)になってしまった。このたび中通りの道路が貫通して、公園も真ん中にあるので、そこで何かプランが立てられるといいなあとは思っている。

(委員) 魚市場は今も盛況のようなので、市場も巻き込めるといいのではないか。

(委員) ふるさとづくり推進委員会の方で、以前、花火を打ち上げる場所のことが問題となり、花火に代わるようなものがないかということが議論されたことがある。そのときに、やはり境川を使って、水門の間だけでも船で行ったり来たりできるようにして、そこでアサリの食べ物やつくだ煮など、浦安らしい特徴のあるお店をやったらどうか、というアイデアを提案した。こういう催し物のようなもので

も、やはりリピーターができるような、しっかりした楽しいものでなければ、人はやはり来ないと思う。

「博物館協力者、サポーターを育成する」とのことだが、すでに市民グループができて、市民活動センターにも登録しているようだ。内容まではわからないが、市民が自主的につくった会だと思うので、そのような会のなかに、若い人やオッカアたちが入って一緒にやっていたらいいのではないかと。しかしながら、やはり市民だけで運営していくことは難しいだろうと思われるので、職員がアドバイスしたりサポートしたりしていくような形でないと、なかなか育っていかないだろう。自分たちだけでやろうとしてもすぐに煮詰まってしまうと思うので、違う世代の人たち加わって何かを一緒にやっていると、浦安のことがいろいろと伝わっていきいいのではないだろうか。

それから、「② 企画展の充実」のところの鉄鋼団地についてだが、前回会議でもいろいろと議論されたが、元町の人たちは鉄鋼団地のことは本当にわからない。この部分は、もう少し出していけるとよいのではないかとと思う。

(委員) 前回の会議において、鉄鋼団地を秋の企画展のテーマにするのがよいのではないかと、いろいろな意見が寄せられたことと思うが、その後どうなったのか進捗状況を伺いたい。

(事務局) 鉄鋼団地とは、現在関係をつくっている段階にある。来る7月31日に、夏休みの自由研究の題材として鉄鋼団地を取り上げられるよう、子どもたちを現地へ連れて行く「鉄鋼団地を知ろう」という講座を開催する。今回、「もっと知りたいふるさと浦安展」では、その事業のプレという意味も兼ねて展示で鉄鋼団地を紹介している。この講座が終わった後、参加した子どもたちに感想を聞いて、その声を一部展示に付け加えたり、今後どのように展示すれば理解してもらいやすくなるかなど、次の課題を考えていきたいと思っている。

(委員) この間の会議では、学芸員や博物館がすべてをやらなければならないということではなく、もともと鉄鋼団地が持っている人材や施設を活用すれば、すぐに企画展として開催できるのではないかと、ということを議論したのだと思っていたのだが、今の事務局からの回答は、質問の答えになっていない。

企画展の充実ということは、いくつか候補のテーマがあるなかで、どれもそれぞれ準備を進めつつ、最有力候補を一番初めに行ったら、そのほか順位づけして一つひとつ開催していくということだと思うが、学芸員だけで全部をやるのではなく、地域がもつ人材を使ってやらないととても無理であろう。そういうことをやっていくことも、キュレーター(学芸員)としての力の一つである。

今後の企画展として、現在のところ最有力候補のテーマは何なのか?

(事務局) 13年度からの企画展を一覧にまとめた資料をつくってみたので、見ていただきたい。例えば、13年度の特別展「アオギスがいた海」。これは、図録もつくった企画展だが、その下に書かれた「夏休み作品展」を企画展扱いにして一緒に議

論するのはそもそもおかしいことではないかと思う。「企画展」というものについて持っているイメージがそれぞれ異なるため、「企画展、次は何やるの?」と質問されると、こちらもどう答えたら良いものか危惧してしまうところがある。資料をただ並べただけの展示を「企画展」と言っているものなのか。テーマに合わせて集めた資料を整理し、人に見てもらえるよう展示し、図録も作成して初めて「企画展」と言えるのではないかと思う。

「企画展というものが本来どういうものなのか」ということをここで一度整理して議論できればと思う。内容のレベルを問わなければ、資料を並べて、「これは、企画展です」と自分たちで言ってしまうばそれでよいのだから、「すぐにできる」と言うこともできるし、逆に「すぐにはできない」という答えになってしまわざるを得ない部分もある。

(委 員) 例えば、「アオギスがいた海」とか、「おらんハマのゆくえ」とかは、「特別展」というような括りにし、今回やろうとしている「もっと知りたいふるさと浦安展」は、「夏休み企画展」というような言い方にしてもよいのではないか。

「企画展の候補は?」と聞かれて学芸員が答えられないというのは、誠に情けない限りである。将来的な展望が全くないということの表れなのではないだろうか。毎年は無理でも、2年に一回にするとかして計画することはできるだろう。厚さはともかく、図録などの印刷物をつくって後世に伝え残していくという意識をもって、きちんと棲み分けを考えて進めていくべきだろう。何をやるのかが具体的に決まっていないうちは、予算もつかないはずである。

テーマが同じでも、切り口を変えれば違うものになる。海苔でも、毎回これだけの人が入っているということは、切り口をいろいろと変えているから、何回やってもそれなりに成果が出ているのであろう。

10年、20年やっているのと、だんだんネタが切れてくるというのもわかるが、しっかりと展望をもってやっていかないと、これからますます難しいのではないか。企画展だからといって安易にやればよいということでは決してないとは思いますが。

(委 員) 7月31日の鉄鋼団地へ行く講座は、どのような内容なのか?

(事務局) まず、バスで鉄鋼会館へ行き、鉄鋼団地の生い立ちや現状を説明いただく。その後、バスで団地のなかを巡り、ある鉄鋼所のなかを見学させてもらうという段取りになっている。小学校4年生以上、20名という定員で募集している。

(委 員) 大人が参加できるような鉄鋼団地の企画はないのか?

(事務局) 対象は「小学校4年生以上」となっているので、大人が参加してもかまわない。

(委 員) 今回は、市民がどのようなところに関心を持つかなど、リサーチする良い機会にもなると思うので、そのあたりのこともしっかり意識して行くとよいだろう。例えば、その見学会のためのワークシートをつくるとすると、どんなものがよいのか考えることもできる。実際に、ワークシートをつくって、今回使ってみるの

もよいのではないか。

(委員) p3の「テーマ： 東京湾の魚(イメージ図)」について。これはなかなかいい図になっていると思うが、一つ大塚家住宅と宇田川家住宅が抜けているのではないか。特に、大塚家はまさに漁師の家だし、小学生があそこでふうかし(アサリの味噌汁)をつくったりするのもよい。博物館が中心となって、有機的につながりを持ち、総合的に市全体がミュージアムになるということがよく表れている。

もちろんそこには、人材を活用する必要がある。「ぶらりと来ても必ずお土産を持ち帰れる博物館」にするためには、これもやはり人材が大切である。学芸員だけが背負うべきことではなく、いろいろな方に関わってもらおうということが重要だろう。

(委員) 浦安テレビをもっと博物館で利用したらいいのではないか。よく幼稚園や保育園のことを紹介しているが、映像で流れると結構親しみがわくと思う。

例えば、夏休み前に子どもたちに行きたいと思ってもらえるように、「博物館でこんなことをやっています」というようなことを放送してもらえると、足を運んでもらうきっかけとなる。テレビは影響力が大きいので、利用するとよい。

(委員) 「テレビでこういう放送がある」ということを予告するにも、ツイッターは有効である。それは、博物館で発信しなくても、市民の方に発信してもらって、それをリツイートしてもらえれば、さらに情報が広がっていく。

すでに、博物館の公式のツイッターが開設されているのだが、それが一向に進行していない。アイコンに「あっさり君」が使えず、なぜかタマゴのままになっている。なぜ、できないままなのか？

(事務局) 担当が現在調整している。他の市内施設のなかには自分のところで独自にやっているところもあるので、それらを確認しつつ、早いうちにツイッターは進めたいと考えている。

(委員) タイムスケジュールとしては、具体的にいつごろになるのか？ あっさり君の画像については、「よりよい画像のあっさり君にするには、市の方の何かの許可がないと使えないからタマゴのままにしてある」と担当者から聞いている。最初は、あっさり君の画像が入っていたのだが、何かに気を使ってタマゴのままに直したようだ。あっさり君のアイコンがないままでは、一般の方には親しみがわかないと思うし、パッと見て「浦安の博物館の情報だ」ということがわからないので、アイコンは必要なものである。

(委員) 境川を中心にしたイベントを企画してもらいたい。境川は、元町から新町まで続いているものなので、全体の市民の皆さんに興味をもってもらえる行事ができると思う。幸い博物館には4つの保存会もあるので、皆さんで検討してもらえれば良い行事ができるのではないだろうか。

水門がいつも空いているわけではないので、そのところがいちばん難しいだろう。魚は、たくさんいる。

- (委員) 境川の護岸もきれいになったので、釣り堀のようなことをしてみたらどうか。
- (委員) 最終的には、博物館に来てもらわないといけないと思う。境川で遊んでそのまま帰ってしまうのでは、博物館が主催する意味もないため、最後の終点が博物館になるように計画するのがよい。
- (委員) 市民 16 万人に喜んでもらうとなると、そういうことをやるしかないのではないか。
- (委員) 今の乗船体験は、子どもたちの参加が主だと思うが、護岸もきれいになったので、高齢者の方々にも楽しんでもらえるように、船で往復してもらうなどを検討してみたらどうか。
- (委員) 市民まつりがあるときは、毎年入館者が多い。そのときの入館者を分類すると、①トイレだけを使いにくる人 ②トイレを借りたついでに博物館も見学する人 ③もともと博物館を見学することを目的にした人、という 3 タイプがある。  
そういうイベントの際には、文化会館の前の方まで出て行ってチラシを配布するとか、先ほど出たように J-COM のテレビを利用するなどすればよいと思う。ただ、「博物館の活性化」となると、建物のなかでいろいろなものを考える必要があるとは思うが。
- (委員) 先日、嫁入り船をやったときには JR とタイアップして開催したものだったためか、博物館に大勢の人が集まった。ああいうときの来館者から寄せられた意見などはなかったのか？
- (事務局) 終点が博物館になっていたので、トイレも含めて、大勢の方に来館いただいた。不特定多数の方がたくさん入る際にどのようなイベントを組むことができるかということは、考えなければならないことだとは思う。来館した方は、「こんなところがあるんだ」と喜んではいらっしゃったと思う。
- (事務局) 今年の 6 月議会で、西山議員から博物館をもっと活性化すべきという意見があり、市の考え方についての質問があった。その際、「当博物館は、近隣の博物館に比べてみても 3 倍近くの入館者がある。現在でも 9 万人あるので、博物館としては、この数を最低限の数として捉え、ここからもっともっと増やしていきたいと考えている。ただ、それは一過性のイベントに頼ったものではなく、博物館本来の事業によって活性化していきたいと考えている。そのための方策を現在文化財審議会でも議論していただいている」という趣旨の答弁をしたところである。教育委員会としても、「一過性のイベントにこだわるのではなく、もっと地に足をつけた博物館らしい事業をしながら、活性化してほしい」と考えているところなので、PR としてイベントを行うことも大切ではあるが、やはり博物館らしい事業をしっかりとやっていきたいところである。

(委員) そういう意味でも、やはり今の展示をさらに活かせるような工夫や、理解しにくいところをよりよく理解してもらうにはどうすればよいかということを考える必要がある。そのための個々のアイデアは、どこに反映していったらいいのか？ また、その機会はいつなのか？ 私自身もいくつかアイデアをもっているのだが、この会議の場で具体的な細かいことまで申し上げるのがよいのか？ それとも、そういうことを吸い上げるような機会を別に設けていただけのものなのか？

(委員) 一般市民の方からでも、そのようなアイデアがあれば随時受けつける。しかし、予算や人員の問題もあるので、すべてを実現できるというものではないのは、ご理解いただきたい。

何か特別なお考えがあるようならば、この場でお話しいただいてもかまわないし、学芸員に直接お話しいただいてもかまわない。

(委員) では、時間がないので、一つだけ申し上げたい。海苔干し場が田に広がっている雪の日の写真が展示してあるが、あれはなかなか気づかない。解説ボランティアでもよいのだが、「これは何の景色だと思いますか？」という問いかけがあると、注目してもらえらると思う。せっかく展示してあるのだから、わかってもらえるような工夫をした方がよい。

また、「海の映画館」の映像展示について。一生懸命つくった映像だとは思いますが、コンテンツの入れ替えや利用を考える必要があるだろう。うまくボランティア団体などに利用してもらえば、一つの空間としてステージのようにも活用できるのではないか。

(委員) 活性化については、今後も継続的な議題の一つとしてとらえ、何か気づいたことがあったら、事務局に連絡するようにしたい。

### (3) その他

#### ■ 次回の会議

第3回浦安市文化財審議会は、11月18日(水)を予定。

以上をもって、平成27年度第2回浦安市文化財審議会は、閉会した。